

Newsletter

March 2024

<http://www.aack.info>

目次

A.A.C.Zurich と A.A.C.Kyoto

チューリッヒから、92年後の来訪

齋藤清明1

Martin Hood さんからの便り

永田 龍3

日本初の植物地理学者へ遅ればせの感謝の手紙

チューリッヒ・アカデミック・アルパイン・クラブ

マーティン・フッド (元書庫係)

訳：榊原雅晴4

並河治さん追悼・続 (2022年12月3日逝去)

「ボケ」の呼称発生現場実録

本仁久一郎.....7

90歳を迎えるにあたって

芳賀孝郎7

事務局だより10

会員動向10

編集後記10

A.A.C.Zurich と A.A.C.Kyoto

チューリッヒから、92年後の来訪

齋藤清明

昨2023年10月27日、スイスのA.A.C. Zurich (the Academic Alpine Club of Zurich) から Martin Hood 氏が入洛し、A.A.C. Kyoto の幸島会長らと懇談しました。92年前の1931年6月にAACKの先輩、高橋健治さん(1903-47)からAACK創立を記念して『日本アルプス』がAACZに寄贈されたことへの感謝を込めての来訪でした。これを機に両クラブの交流が期待されます。

きっかけは、昨年7月末、AACZの元書庫係というHood氏からAACKに届いた日本語のメールです。

「当クラブの書庫を整理した際に、高橋氏が1931年にAACK創立記念品として贈られた本がみつかりました。この発見を記念しAACZ機関誌に掲載するため『感謝の手紙』を書きましたので草稿を見ていただければありがたい」

その『感謝の手紙』は英文で、高橋、今西錦司、西堀栄三郎さんの3人パーティーで剋岳チンネを初登攀したことにも触れるなど、高橋さんのことをよく調べていました。

AACKでは事務局の永田理事が窓口となって対応し、高橋さんの写真を送るなどしているうちに、Hood氏が来日しました。

Hood氏は英国人で66歳。オックスフォード大出身。スイスのUBS銀行に勤め、東京でも6年間仕事したとのこと。30年前には京都市外大に留学。夫人は日本人で、福井県の大学で教えていて、Hood氏は「私はリタイア後は福井に来るつもりです」。

今回来日の滞在先、福井からJRサンダーバードで京都駅に着いたHood氏を永田が迎え、京大の竹田研究室へ。幸島、榊原、竹田、齋藤と懇談。1896年創立のAACZの記念誌(会長の



写真1 高橋健治さん



写真2 フッド氏（京大・竹田研究室で）

メッセージ入り）が贈られ、AACKからも50年史など資料を渡しました。

京大本部図書館のAACK寄贈図書コーナーに案内。かつてAACK文献センターにあった蔵書を見てもらいました。そこには、高橋さんがAACZに寄贈したのと同じ『日本アルプス』（1930年、新光社発行。三高山岳部蔵書印あり）もあり、Hood氏も「これです」とうなづいていました。AACKが1931年に創立会合を催した楽友会館にも訪れたのち、懇親会をもちました。

Hood氏は『感謝の手紙』を手直しして載せ

るとのこと。また、今春にも来日の予定です。

今回、Hood氏の入浴や『感謝の手紙』で、AACKの創立をめぐる新たなエピソードが加わりました。

AACK50年史『ヒマラヤへの道』（1988）には、「A.A.C.（アカデミッシェル・アルペン・クラブ）という名称は、スイスのベルンやチューリヒなどで使われ活動しているのを、今西らはアルパイン・ジャーナルなどで知っており、そのようなクラブを作りたいと考えた」と記しておきました。

そのA.A.C.Zurichに、高橋さんがA.A.C.K創立直後に訪れ、『日本アルプス』を寄贈していたのです。

三高・京大で今西錦司、西堀栄三郎さんとともに「三羽がらす」といわれた高橋さんは、1930年春卒業するや（結核のため今西さんらより2年遅れで）、植物学研究のため渡欧（2年間）。ドイツ・ミュンヘンに居を定め、植物園で勉学しつつ、登山やスキーに励みました。31年4月にチューリッヒに移り、リューベル教授に師事。この間にスイス山岳会や英国山岳会を訪問。また、ドイツやスイスの各都市で活動していたA.A.C.（アカデミッシェル・アルペン・クラブ）について、京都に報告していたはずでした。

そして、A.A.C.Kyoto創立発会式を1931年5月24日に楽友会館で催したと連絡を受けた高橋さんは、6月にA.A.C.Zurichを訪問して記念に『日本アルプス』を寄贈。その際に、「我々の仲間が、あなた方のようなA.A.C.（アカデミッシェル・アルペン・クラブ）を京都につくった。ヒマラヤを目指して」と語ったことであろう。

その後、高橋さんは1932年5月に帰国します。このとき、AACK創立の目標のヒマラヤ遠征（カブルー計画）はすでに流れていたものの、帰朝歓迎会で高橋さんは「欧州登山界と本クラブの使命に就いて」と題して話し、7月にAACK総務に就任。その夏、今西、西堀さんと樺太・東北山脈に遠征します（帰路の青函連絡船でローゼさんと出会う）。

高橋さんは戦後間もなく44歳で病死されたので、その後のAACKの活動を目にしていま



写真3 京大図書館でフッド氏と

せん。笹ヶ峰ヒュッテの建設や関西学生山岳連盟の設立（1929年）、アールベルグ・スキー術の普及指導など、若くから広く活動されたものの、晩年は結核のため療養生活でした。「娘にも会わせられなかったのよ」とローゼ夫人は語っていました。

逝去間もない1948年、『岳人』第8号（当時は伊藤洋平さんから京都岳人社発行）に細野重雄さんが「高橋健治さんの山」を執筆し、今西



写真4 楽友会館でフッド氏と

さんらの協力で作った「高橋健治登山歴」には、ヨーロッパ・アルプスでの華々しい山歴が記されています。

なお、このNewsletter第1号（1996年）～7号に「AACK人物抄 高橋健治さん」を5回掲載、61号（2012年）に「高橋健治・ローゼ夫妻と娘エリザベスさんのこと」が載っています。

Martin Hood さんからの便り

永田 龍

AACK homepageには「お問い合わせ先」欄を設けており、editors@aack.info宛にメールを送信すると、自動的にAACK事務局にその内容が届くようになっている。過去にも、雪山讃歌の著作権やヤルンカン登頂の放映に関する問い合わせ等を受けている。

2023年7月25日早朝、突然、事務局に「Message from the Academic Alpine Club of Zurich」と題するメールがMartin Hoodさんという方から届いた。

内容は下記の通りで、美しい日本語で私たちにも大変馴染みのある高橋健治さんのことが記載されており、Academic Alpine Club of Zurich (AACZ) というAACKとよく似たクラブの書庫で高橋健治さんから贈呈された「日本アルプス」という本を見つけたので、高橋健治さんに関係する写真を送ってほしい等のごことが書かれていた。「日本アルプス」の高橋健治

さんの添え書きの写真が添付されており、Dr. Kenji Takahashiの署名やA. A. C. Kyoto (1931, Juni)の文字も見える。高橋健治さんへの礼状と題するAACZの機関誌に掲載予定の原稿案も添付されており、英語で、高橋健治さんへの謝意と詳細かつ正確なAACKと高橋健治さんの歴史が書き込まれていた（榊原雅晴さんの訳文参照）。

AACKの皆様

こんにちは。AACZ (the Academic Alpine Club of Zurich) のMartin Hoodと申します。私はAACZの元書庫係です。

最近、私たちのクラブの書庫を整理した際に見つけた本についてお知らせします。1931年

に京都大学アカデミック・アルパイン・クラブが創立された際、貴クラブの創立メンバーの一人である高橋健治氏が、記念品として贈ってくださった日本アルプスに関する本です。ここにその本の写真と高橋健治氏のメッセージを添付します。

AACZの今年後半発行の機関誌に掲載する目的で、この発見を記念して、私は高橋健治氏に「感謝の手紙」を書きました。機関誌に掲載する前に、草稿を見ていただければと思い、ここに添付します。もし間違いや誤解があれば、教えていただけたらありがたく存じます。

また、この機関誌に掲載するこの原稿に添える高橋健治氏の写真があったらと思うのですが、AACKのアーカイブなどで、ご提供いただける写真がございましたら、ご提供願えませんか。

このようなお願いでご迷惑をおかけして申し訳ございませんが、久しぶりに皆様と当クラブとの連絡を再開できることを楽しみにしております。

どうぞよろしく願いいたします。

Martin Hood, AACZ

私は、状況がもう一つ把握できないまま、メールの内容をまず理事会メンバーに転送し、どなたか高橋健治さんの写真を持っていないか尋ねた。また、高橋健治さんのことに詳しい斎藤清明さんにもメールを転送した。

AACKアーカイブに詳しい竹田晋也さんからは写真については全く心当たりがないとの返事が届いた。山岸久雄さんからは数枚の写真、

笹ヶ峰ヒュッテ前での集合写真と白頭山遠征の集合写真を送っていただいた。斎藤清明さんからも高橋健治さんの華麗なスキーの写真を送って頂いた。

私は、さらに高橋ローゼさんゆかりの小谷温泉山田旅館と、AACKと西堀榮三郎の資料を多く所蔵している西堀榮三郎記念館探検の殿堂の角川咲江さんにも、高橋健治さんの写真の有無を尋ねた。山田旅館の山田誠司さんからは写真はないけれども高橋健治さんゆかりのムービーが残っているとの返事を頂き、そのムービーから切り取った写真を送っていただいた。

角川さんからは山岸さんに送っていただいた、おそらく出典は同じと思われる写真と、合わせて、是非Hoodさんに渡してほしいと探検の殿堂作成のAACKと西堀榮三郎に関する冊子数冊を送っていただいた。

山田旅館には8月に京大ヒュッテに居合わせた杉山茂さん、樋口敦子さん共々写真のお礼に伺い、その際、高橋健治さんゆかりのムービーを見せて頂いた。おそらくオーストリアのスキー場と思われる場所でのスキー滑走の風景と、梅池スキー場、立山室堂、小谷温泉スキー場でのスキーのデモンストレーションが映っていた。スキーの達人の噂通りかなりうまい。

まずは、いろいろな方から送って頂いた写真をまとめてHoodさんへの返信のメールに添付した。

Martin Hoodさんとは何者か？竹田さんからは深田久弥の日本百名山の英語訳をされている方らしいとの情報が届いた。そうこうしているうちにHoodさんから10月の終わりに京都を訪れるとメールが届く。当日、京都駅まで迎えに行った。プラットホームの階段から私たちと同じ匂いのする人物が降りてきた。一目でHoodさんと判った。

その後の経緯は、先に掲載の斎藤清明さんの記事「チューリッヒから、92年後の来訪」をご覧ください。

日本初の植物地理学者へ 遅ればせの感謝の手紙

拝啓、高橋先生

寄贈された図書『日本アルプス』のお礼を申

し上げようと手紙を書いています。この素晴らしい贈り物への謝辞が遅くなりましたことを、まずおわびします。恥ずかしい話ですが、この

本は私たちが再発見するまで何十年もの間、クラブの書庫に眠っていました。

日本語で書かれているため、前任者が十分な注意を払わなかったのでしょう。しかし、表紙の裏側には流麗なドイツ語によるあなたの献辞が、ブルーブラックインクではっきりとしたためられているのです。

< A.A.C.Zürich へ！ 高橋健治博士より
A.A.C.Kyoto 誕生を記念して (1931年6月)
>

私はもっと早くあなたの名前に気付くべきでした。なぜならかつて先生と私の足跡が交わったことがあるからです。数十年前、2人の友人に誘われて、私は日本の剣岳（標高2999メートル）の岩峰に登りました。岩峰はドロミテの「Grosse Zinne」にちなみ「チンネ」と名付けられていました。ベルクシュルントがあり、それを飛び越えなければ取り付けなかったことが印象に残っています。あなたは1927年8月、京都一中からの仲間である今西錦司（1902-1992）、西堀栄三郎（1903-1989）らとこの岩峰に登りました。私たちはその足跡をたどっていたわけです。

当時としては大胆なクライミングだったでしょう。十数ピッチのうちの核心部は、現在でも5級グレードです。私はロープの3番手にもかかわらず、レイバックでの登攀はかなりハードでした。そのピッチを、先も見通せない中、現代のクライミング用具も使わずリードしたのです。たいしたものですね、高橋先生！

そして大学時代、あなたは同じメンバーで京都のアカデミック・アルパイン・クラブを設立しました。1931年半ば、本を寄贈いただいたちょうどその頃です。私たちを同志、あるいは見習うべきモデルと評価してくださったことを光栄に思います。なぜなら、以来、AACKは登山の歴史に輝かしい足跡を残してきたのですから。

あなたの共同創設者も学者として名を成しました。今西は昆虫の研究から始め、生態学者、民族学者、そして霊長類学者へと変身を遂げました。翻訳もされた『生物の世界』で示された独創的な進化論は、海外でも広く知られています。あなたのような友人に助けられながら、今西は日本や海外の山々で新しい岩場や冬季ルートを開拓しました。

西堀も電子工学や工業品質管理の業績で有名です。アカデミアに戻った後、彼は日本初の南極越冬隊を率いました。『南極越冬記』はベストセラーになりました。

ただ残念なことに先生自身は学術的には多くの足跡を残せませんでした。1903-1947年。同世代の研究者が80歳を超す長寿に恵まれたのに対し、あなたは悲劇的に短命でした。しかし、チンネ・ルートから判断すると、短い生涯を十二分に燃焼させたといえるでしょう。

1930年代は格別に忙しかったはずですが。あの本を贈ろうと考える時間があつたことに驚きます。1930年にミュンヘンに行き、植物分布が地形によってどう形成されるかを研究しました。翌年4月、チューリッヒに移り、著名な植物学者エドゥアルド・リュール（1876-1960）に師事しました。この時期に、私たちに本を寄贈されたのでしょうか。

ドイツ留学中、あなたは樺太の森林をテーマに博士論文を提出しました。日本の山岳地域における森林限界線に関する先駆的な研究です。これもまた、パイオニアワークでした。

スキーについても同様のことが言えそうです。ヨーロッパでの休暇中、当時、スキー術に革命をもたらしていたハンネス・シュナイダー（1890-1955）の指導でアルペンスキーに磨きをかけたのです。

多くの日本人スキーヤーはシュナイダーの「アールベルク・スタイル」をまだ知りませんでした。日本に戻ってからスキーの本を2冊上梓し、トレーニングキャンプも企画しました。参加者から「スキーの神様」と呼ばれたそうですね。

さらに恋をする時間もありました。あなたはこの話題を避けたいかもしれませんが、お相手の言葉を勝手ながら引用させていただきます。

< 1932年9月、北海道から本州に戻る津軽海峡フェリーの中で、私は夫となる高橋健治博士と出会った。日本初の植物地理学者であり、登山とスキーのパイオニアでもある彼は、どんな山奥でも平気だった。翌年の正月、彼は私を越後（現在の新潟県）、愛してやまない「雪国」に誘ってくれた。私は日本に来て3年目。日本に関する文献はほとんど読み、日本中の奥地に足を運んでいた。日本のことは十分に知っているとうぬぼれていた。しかし、それは勘違いだっ

た。ゆりかごから墓場まで、ここでは人生のすべてが雪とともにあった……>

ほどなくあなたは若いドイツ人旅行作家のローゼ・レッサーと結婚し、娘のナミが生まれました。残念ながらこの結婚は京都の裕福な商家である実家に歓迎されませんでした。

もちろん、あなたは誕生して間がないAACKの活動にも没頭しました。AACZと違って、あなた方のクラブはヒマラヤ登山を明確に意識していました。すぐに遠征形式の登山が実践されました。1931年末、富士山に1週間滞在し、4つのキャンプを置き、凍てつき、風が吹きすさぶ山頂で数日を過ごしたのです。

ヒマラヤへの道は激動の国際情勢によって残念ながら阻まれました。その代わり朝鮮半島と中国の国境にある極寒の白頭山に冬期初登山したことで満足するしかありませんでした。1934-35年にかけてのことです。これらの初期

の遠征は、戦後のヒマラヤ遠征の基礎となったのです。

しかしこれらの勝利を見ることもなく、あなたは1947年に44歳の若さで生涯を閉じました。結核との長い闘いの末に亡くなったとき、あなたの仲間たちは戦争で休止していたAACKを復活させる過程でした。そして1952年、今西教授はマナスルへの偵察隊を率い、4年後の日本初の8000メートル峰登頂へ道を開きました。初登頂の栄誉を担ったのはAACK会員でした。以来、AACKはあなたを含む創設者のビジョンを忠実に受け継ぎ、ヒマラヤでの活動を続けているのです。

当初は専門的な学問の一分野に過ぎなかった植物地理学ですが、今や私たちが山に出かけるたびに関心を抱かざるを得なくなりました。気候変動のストレスが高山の植生に与える影響を懸念し、日本を含む国際グループが研究に取り組んでいます。しかし暑さで生態系全体がほころびつつある今、それとてもささいな心配でしかないのかもしれない。

しかし感謝の手紙を憂鬱な気分で締めくくるのはやめましょう。日本の公共放送が環境問題を取り上げる時間が増えたそうですね。樹木や草花の植生変化といったものです。いまや植物地理学は日本の主流になりました。登山やスキー同様、それらは高橋先生が種をまいたものです。真の学者・登山家からの贈り物として、私たちはこの本を大切にしてください。

敬具

チューリッヒ・アカデミック・アルパイン・クラブ
マーティン・フッド (元書庫係)

訳：榊原雅晴

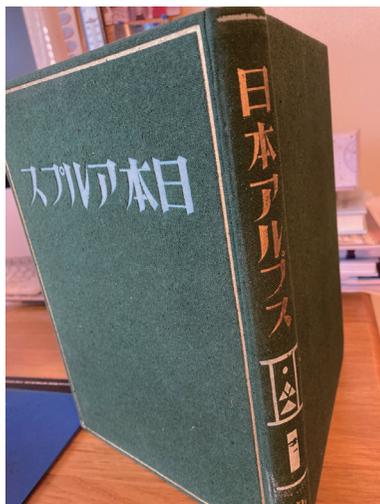


写真1 AACZに保管されていた『日本アルプス』= Hoodさん提供

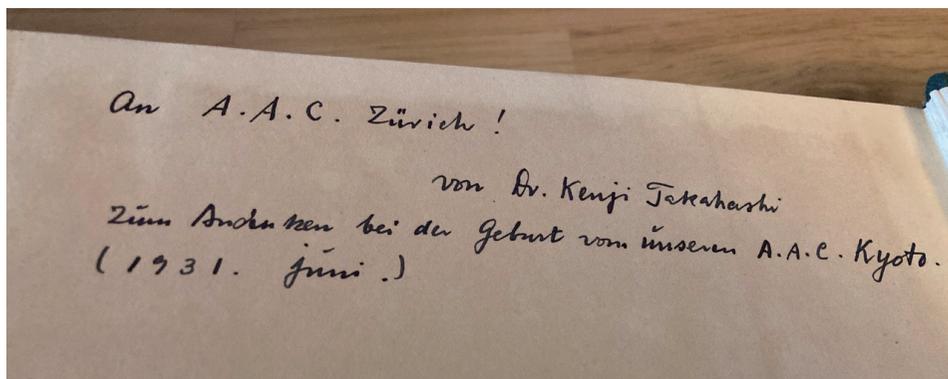


写真2 『日本アルプス』の表紙裏面に書かれた高橋の献辞= Hoodさん提供

並河治さん追悼・続 (2022年12月3日逝去)

「ボケ」の呼称発生現場実録

本仁久一郎

1951 (昭和26)年7月、湊沢合宿の先発隊一行は、徳沢付近の小川に差し掛かっていた。幅5m深さ50cm程の小川を、飛び石伝いに渡っていた途中で、新人の並河治が足を滑らせ水中に転倒した。膝くらいの深さであったが、上高地で仕入れてきた米を入れたザックが頭上に覆いかぶさり、立ち上がろうともがいていた。その時、後に続いていた脇坂ザッカス (誠) が流れに飛び込み、ザックを掴んで引き起こし、並河は危機を脱した。全身ずぶ濡れになっていたが、表情は相変わらず細い眠そうな目をしていて、それを見た廣瀬エト (幸治) が「相変わらず眠そうやなー」とつぶやいた。

その日の夕食が終わった後、エトが「並河の歌ができたぞ」と発表した。それは当時の喜劇役者エノケンが映画の中で歌った「おれは村中で一番、モボ (モダンボーイ) だと言われた男・・・」を、三高山岳部がアレンジして、各部員のあだ名の歌を作っていて、廣瀬エト (木馬道での転倒) や兼松ハングロ (雄象、黒菱でのボーゲン) 等の由来が歌い込められていた。そこからまた転用して並河の歌が作られた。

並河の歌:

おれはヤマシロ (京都府立山城高校) で一

番・・・(中略) 水中転倒の一件描写、歌詞詳細忘却!・・・(結び) こいつはやっぱり寝呆け! かくて彼のニックネーム“ネボケ”⇒“ボケ”が成立した。

湊沢に入るには、横尾で梓川の本流を渡るが、当時そこには今日のような吊橋は無く、杉か落葉松の樹皮を剥いた丸木橋を渡らねばならず、水量が多く流れの速い本流に転落した溺死者が、戦前から何人か発生していた。ボケの転落事故が本流ではなく、支流の小川であったため、ボケ本体もその愛称も、その後70余年の命脈を保ち続けることができたのである。

編集人注

この文は、著者・本仁さんによれば、「(105号掲載の)ボケの追悼文を見ると、自分の書きたいことは殆ど書きつくされている、けれどもただ一点、呼称(あだ名)発生の現場に立ち会い、生き残っているのは自分一人だけになったので、その実況を伝えたいと思いつき、またも駄文を連ねることとしました」としてご寄稿いただいたものです。本仁さん、ありがとうございました。

90歳を迎えるにあたって

芳賀孝郎

この頃私の仲間、友人が次々と天国へ旅立つことが多くなった。残された者は追悼文を依頼される。年を取るとなかなか文章が書けなくなり、頭に浮かぶのは仲間の死より、自分の死の順番が近づいてきていることが気になる。順番は必ず廻って来る。

私としては健康で90歳の壁を乗り越えたい

と意気込んでいる。その為の準備が必要である。しかし私は自然にしたがって生きたい。

私はお世話になった多くの先輩、仲間たちはどのように死を迎えたのか知りたくなった。私にとって特別な存在であった松方三郎先輩は74歳、加藤泰安先輩は72歳でお亡くなりになった。その両先輩から直接指導を受け、議論

をし、行動を共にしたことがあった。

松方三郎先輩について

松方先輩は学習院時代、京都大学時代日本の近代登山のパイオニアとして活躍された。燕岳へのスキー登山で初登頂、横有恒リーダーの慶応と合同で槍ヶ岳の積雪期初登攀、北鎌尾根から槍ヶ岳登攀等の記録を残した。その後英国留学中にスイスアルプス登山で数々の記録を残し、秩父宮様のアルプス案内役を横有恒と共に務めた。

先輩は、3年余のヨーロッパ留学を終えて、1928年2月帰国した。翌年英国山岳会に見習い、新しい日本山岳会作りに乗り出した。虎ノ門にルームと図書室を持ち、運営も選出された理事会が当たることになった。会長、副会長を設け、「山岳」の編集、会報を発刊した。山岳図書展の開催は自ら担当した。その情熱により、今日の日本山岳会の基礎をつくられた。

先輩は自然保護の先駆者であった。「ヒマラヤ、ヒマラヤと騒ぐが、自分の山のお花畑を荒れるに任せて何がヒマラヤか。だから促成文化国は土台が弱くて困る」と嘆いていらした。

田口二郎氏は「松方三郎ほど長い間、山の世界の指導者として厚い人望を集めた人はいなかった。いつも生き生きと明るく、知性に満ち、問われれば的確な判断を常時できる人であった」と称賛していた。

学習院山桜会では毎年入部する新人歓迎の先輩の言葉があった。「山岳部は他のスポーツと異なり、相手は人間ではなく自然であり山である。山を相手にする姿勢は堅強な気持ちでないと命を失うことがある。自己責任は求められる。登山には観客が居ない。登頂したかどうかは、本人のみが知る。自己申告である。それにはフェアプレイの精神が要求される。即ち紳士であること。英国では登山者は紳士であると社会的に評価されている。君たちは紳士の卵である」と歓迎された。私たちは良き先輩に恵まれた。

先輩は1973年9月15日に逝去された。1970年エヴェレスト登山隊隊長を引き受けて、日本人によるエヴェレスト登頂を成功させた。その時の高度障害に関係があったと言われている。

亡くなる20日ほど前、病床上で洗礼を受けた。

洗礼名はピオ・アンプロジオであった。島田巽氏は生前、病室におられた松方にお会いした時「ピオが洗礼名なら洗礼を受けてもいいな」と言われたことがあった。何故かと聞くと「1922年から1939年までローマ法王の地位にあったピオ11世は立派なアルピニストだったからさ」というのが松方の説明であった。法王はイタリア人最初のモンテ・ローザ東壁登攀者の一人であった。

加藤泰安先輩について

加藤泰安先輩は学習院高等科時代の1931年12月～翌年1月に槍ヶ岳から奥穂・西穂への初縦走に成功し、京都大学時代は冬期白頭山登山、大興安嶺、内蒙古等を探検した。戦後は1953年第1次マナスル隊に参加、1958年京都大学チョゴリザ隊副隊長、1962年京都大学サルトロカンリ隊副隊長としてともに初登頂に成功した。1964年京都大学西イリアン（ニューギニア）学術調査登山隊隊長を務めた。

ある日、私は泰安先輩から呼び出しを受けた。当時先輩はヒマラヤ委員でエヴェレスト隊員の選考委員を担当していた。

松方先輩は1970年70歳でエヴェレスト隊長を引き受けた。1922年奥穂の雪渓で板倉、伊集院、慶応の早川、大賀、渡辺が滑落事故を起こした時、一番上にいた松方先輩は、引っぱられてシュルンドへ落ちて止めた。5名が危なく助かった。その時先輩の片肺はつぶれた。泰安先輩は片肺の高齢なエヴェレスト隊長の世話役を芳賀が引き受けるように云われた。お付きの医者はチョゴリザ隊の中島ドクターであった。その時私の父は病気で倒れ、札幌へ帰る予定であった。私にはエヴェレストへの絶好の機会であったが、悩んだ末お断わりした。私の父は1970年72歳で亡くなった。

私たちは、泰安先輩夫妻の仲人により1963年4月四谷のイグナチオ教会で結婚式を挙げた。その時松方先輩がお祝いにいらして下さった。

学生時代には私たちは泰安先輩に教を乞うたが相手にしてくれなかった。それが鹿島鍾遭難の搜索活動のお蔭で先輩と行動することが出来た。酒を飲み、歌い踊り、語りをするようになった。

1957年3月遭難から復活した山岳部は横尾尾根から槍・奥穂・西穂さらに北穂・明神の登頂に成功した。その記録は、泰安先輩の槍から奥穂・西穂の初縦走から25年目の年にあたり、初めて先輩からお褒めの言葉があった。その後もW・Sヤングの「登山について」をテキストに登山の指導を受けた。

1958年京都大学学士山岳会チョゴリザ登山隊に泰安先輩の推薦で私は運よく参加した。この遠征は私の人生のバックボーンとなって今日に至っている。

ところがチョゴリザ登山も遠くなったこの頃である。泰安先輩の「ヒマラヤで大きな山を経験すると日本の山が小さく見えることが危険の証である」「危険を避け、困難を克服せよ」との山の教えを思い出す。

泰安先輩はいつも書斎に掛けてある西域・中央アジアの大きな地図をじっと眺めていた。先輩の登山の始まりは、父上からスウェン・ヘディンの探検の話聞いたからだという。

晩年医者から酒とたばこを禁じられていた。亡くなる前はさすが煙草を辞めたが小瓶のビールをチビリチビリ美味そうに飲みながら西域の地図を眺めていた。若き日の事とこれからの大きな探検の夢を見ているように思えた。

作家・井上靖の「加藤さんの山登りは趣味ですか」との問いに、「私の山登りはホビーでは

なくライフです」と答えた時の先輩の厳しい顔を思い出す。先輩は亡くなる前にペトロの洗礼名を受けた。

私も2019年85歳で先輩と女房に倣ってカトリックの洗礼を受けた。霊名はガブリエルである。当初私は両先輩に見倣い、死の直前に洗礼を受けることにしていた。即ち天国泥棒で行こうと思った。

ある時フランス人神父に天国泥棒の話をする、神父は異常な口調で説教が始まり、その対応に困ったことがあった。私はAACK谷氏の案内の2008年イタリア巡礼に参加した時の引率者である世田谷教会・関根神父に相談した。

関根神父は「地域の教会、札幌・円山教会のアメリカ人・ケン神父は生まれながらのキリスト信者であり、良きキリストの理解者であるのでお会いするように」と勧められた。私はケン神父の教えで、解放された人生と永遠の命を信じて、洗礼を受けた。良い神父に巡り会えた事に感謝している。

いつも松方・加藤両先輩の言葉を頭に入れ、山登りをしてきた。今年ようやく90歳を迎えられることをありがたく思っている。

私の頭の中には過去の登山経験と知識がまだ少し残っている。しかし体力は小学校の低学年と思っている。この現実が90歳と自覚している。

2024年正月記

事務局だより

本号には、Academic Alpine Club of Zurich (AACZ) 会員の Hood さんの来京に関する文章が掲載されています。Hood さんの情報によると、AACK の設立メンバーの高橋健治さんは、AACK 設立当時 AACZ と強いつながりを持っておられたようです。その縁で AACZ にあやかって新しく設立する山岳会を AACK と名付けたのかもしれませんが。Wikipedia によると、“academic alpine club of” と名前の付く山岳会は AACK 設立年の 1931 年当時、欧州ではいくつかあり、それなりにポピュラーな名称だったようです。それらのうち 1896 年設立の AACZ は AACM (Munich), AACI (Innsbruck) について古い。日本では 1926 年設立の北大山岳部・山の会が AACH (Academic Alpine Club of Hokkaido) と名乗っていますが、いつから AACH という呼称が使われるようになったかはよくわかりません。AACZ の会員は主に Zurich にある大学の関係者（卒業生、学生、教員等）となっていますが、この点も AACK と共通したところがあります。AACK をそのまま訳せば京都学術的山岳会などとなるところですが、本会は京都大学学士山岳会としています。

会員動向

訃報

塩瀬捷一郎 2023 年 10 月 31 日逝去
前田栄三 2023 年 11 月 16 日逝去

会員異動

小澤良夫 自宅住所変更

編集後記

新年を祝うその日に能登半島地震が発生し、大きな被害が伝えられています。被災された方々にお見舞いを申し上げます。

地震に関しては、たまたまですが、北陸ではこの冬が大雪でなくてよかったと思います。大雪なら、例えば、大量の雪が屋根に載っていれば建物が倒壊する危険が増します。斜面での雪崩や、道路の積雪も、被害をもたらす、また避難や復旧の障害となります。

登山中に地震に遭ったらどうするか？とは現役のころに考えたこともありますが、その時の状況によりできる対応をすればと言えないのかな、といったところから考えは進みませんでした。今回の地震では、正月ですから山に入っていた方も多いでしょう。インターネットでは、槍ヶ岳の頂上で揺れに襲われたという記事を見ましたが、そのケースを含めて、これまでに人的被害の報告はないようで、ほっとしています。

さて、たいへん遅くなりましたが、107・108 合併号をお届けします。このところ発行が不規則になっており、申し訳ありません。

次の 109 号では、なるべく早く発行するために、締め切りを設けずに原稿の集まり具合によって発行に進むことにいたします。ご投稿くださる皆様には、原稿ができ次第、編集人宛にお送りください。よろしくお願ひいたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り：設定せず

原稿送り先：横山宏太郎

発行日	2024 年 3 月 31 日
発行者	京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所	〒606-8501 京都市左京区吉田本町(総合研究 2 号館 4 階) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科 竹田晋也 気付
編集人	横山宏太郎
製作	京都市北区小山西花池町 1-8 (株)土倉事務所